

ヒューマンコミュニケーショングループ
Human Communication Group

ニュースレター

2002 年度 No. 1

URL : <http://www.ieice.org/hcg/jpn/>

Contents

- ・ 会長挨拶「原点に帰ったヒューマンコミュニケーション活動を！」
- ・ ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) 大会実施報告
- ・ 市民公開講座実施報告
- ・ イベントのお知らせ

**原点に帰ったヒューマン
コミュニケーション活動を！**

平成 14 年度ヒューマンコミュニケーショングループ委員長
中津 良平 (関西学院大学)

電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) は、今年で発足以来 8 年が経過しました。当初はヒューマンコミュニケーションという言葉自体が新鮮だった時代でした。マンマシンコミュニケーション、マンマシンインタフェースの名前で人間対コンピュータのコミュニケーションを人間同士のコミュニケーションに近づけようとする研究は盛んだったものの、人間のコミュニケーション全般を扱おうとする極めて幅広い活動を目指した学会は皆無でした。現時点でも、ヒューマンコミュニケーション研究者は心理学者、社会学者、哲学者など幅広い人たちを含んでおり、HCG が誰を対象にするかというのは難しい問題です。HCG の設立当初は、そのように幅広くて各種の学問が関係し、すべての学問の究極の目標とでもいえる分野に工学から切り込んでいこうという大きな意気込みがあったのではないのでしょうか。

現在の HCG の活動状況はどうでしょうか。たしかに研究会が活発に活動しています。また、先日の委員会で HCG の今後の方向に関して議論した際には、HCG が心理学・社会学などいわゆる文化系の人々から見て HC という境界領域を研究する際の砦になっているという意見が出ました。新しい分野を切り開くことは困難であり、心理学・社会学の分野でも新領域に切り込んでいくのは勇気とエネル

ギーを必要とし、HCG は彼らの活動を支える心よりどころになっているようです。それはそれで HCG が当初の狙い通りに機能していることを証明していると言っていいでしょう。

しかし、もう少し深く考える必要があります。今では工学の分野では HC といっても特に違和感なく受け入れてもらえます。それはそれで結構なことです。しかし、そのような状況に会員が安住しているとしたら問題です。HC は極めて幅広い領域をカバーしており、その研究は人間そのものの研究でもあります。HC に関してはまだ何もわかっていないというのが現状なのではないのでしょうか。本来の HC の研究とは何をめざすべきか、そのためにはどのようなアプローチが必要か、研究テーマとして何をとりあげるべきか・・・ HC 研究がいわば人々に認知されたといえる現在、むしろこのような問いを常に自らに発するべきなのかもしれません。

私自身、ATR で「アート&テクノロジー」研究を始めようとする時には、「人々に受け入れられるのか」「実際にできるのか」といった不安を持ちつつそれなりの覚悟を持って始めました。HC においても、実際にはまだわかっていないことばかりだとすると、それに取り組むことに対して、私たちは常にそのような不安とそしてそれを乗り越えるだけの覚悟を持って進むべきだとおもうのですが、いかがでしょうか。HCG の皆さんにはぜひそのような覚悟を持って研究に取り組んでもらいたいと思います。また、そのことが現在の HCG の個々の活動をより活発化し、新しい方向性を見いだす原動力になるのではないのでしょうか。

ヒューマンコミュニケーション グループ (HCG) 大会実施報告

平成 14 年度企画幹事
管村 昇 (NTT)

ヒューマンコミュニケーショングループ (HCG) 大会が、今春 3 月 7、8 日の両日、工学院大学において開催されました。HCG 大会は、HCG に属する研究会が一同に会し、相互の交流を深めることが大きな目的です。ヒューマンコミュニケーション基礎、ヒューマン情報処理、マルチメディア・仮想環境基礎、福祉情報工学、手話情報学の各研究会が参画し、延べ 300 名の参加者があり盛況裡に終了しました。また「インタラクションによる知識の創生」というテーマで、パネル討論が行なわれました。本パネルは、第二種時限研究専門委員会である「インタラクションによる知識の創生に関する研究会—社会科学系との新しい関係の構築—」の主催で企画、実施されたものです。

HCG 大会に併せて、原島博先生 (HCG・特別企画幹事) による「街の情報化を考える — “いまだけ・ここだけ” の情報環境デザイン—」という題目の特別講演が行なわれました。原島先生等が提案するユニークな情報環境デザインは多くの聴衆の関心呼び、大変興味深い講演でした。

特別講演に引き続き、「情報の検索・探索技術」というテーマで 3 名の講師の方々に講演をして頂きました。東芝 i バリュークリエーション社の村永哲郎氏には、「駅前探検倶楽部」という外出するユーザーのためのナビゲーションサービスについて、コンセプトから実際の運用に至るまでの詳しい話を伺いました。NTT コミュニケーション科学基礎研究所の村瀬洋氏からは、画像、音、映像を高速に探索する「アクティブ探索法」という技術について、研究開発の動機や詳細な処理手順また具体的なサービスの話を伺いました。さらに RWCP (新情報処理開発機構) の岡

隆一氏からは、「マルチメディアデータの実時間検索表示に支援される Human Communication」というタイトルで、さまざまな情報をうまく検索に利用する「CrossMediator」を中心に、検索におけるマルチメディア情報の有効な利用法に関する講演を伺いました。インターネットの急速な普及、メモリの大容量化などによる情報の爆発は、皮肉にも個人が本当に手に入れたい情報を、簡単に、短時間に見つけ出すことを困難にしています。このような状況の中、情報の検索・探索技術はますます重要な技術になってくるものと考えられます。本セミナーは、このような観点から参加者に有益な情報を提供できたものと確信しています。

最後に HCG 大会を開催するにあたって、会場の手配、当日の運営などお世話になった工学院大学の淀川英司先生、長嶋祐二先生にお礼申し上げます。

市民公開講座実施報告

平成 13 年度企画幹事
竹村 治雄 (大阪大学)

3 月 16 日 (土) に、JR 京都駅前にある京都キャンパスプラザにて、市民公開講座を開催しました。今回の市民公開講座は、「バーチャルリアリティと通信が創る未来」というテーマで、日本バーチャルリアリティ学会との共催です。従来、ヒューマンコミュニケーショングループの市民講座は首都圏を中心に実施されてきましたが、初めての試みとして関西での開催となりました。プログラムは、午前中に特別講演があり、午後からパネルディスカッション、さらに京都大学、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学の関連研究室によるデモ展示など盛りだくさんの構成でした。以下簡単にこれらの内容を紹介します。

午前中の特別講演では、東京大学の原島博先生が、「いい顔 いい心 いいコミュニケーション」と題してご自身の研究である「顔学」

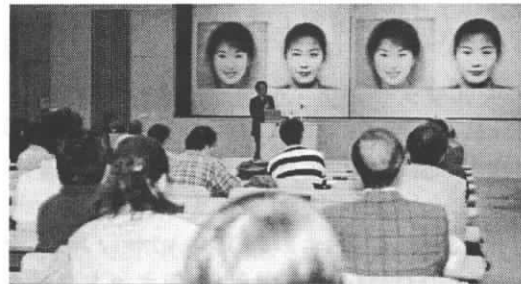
について、顔が与える印象からコミュニケーションまでへとつながる発表を頂きました。講演では、種々の顔をあつめて作成される平均顔について、その作成方法、また職業による平均顔の違いや歴史による平均顔の違いなどからはじまり、現代人の顔の特徴、特徴分析から予測した未来人の顔についてなど、非常に興味深い内容でした。また、コミュニケーションにおける顔の役割についても言及されました。

午後には、「バーチャルリアリティと通信が創る未来」というテーマでパネルディスカッションが、大阪大学教授の岸野文郎先生の司会のもとで行われました。館暉先生(東京大学教授)、高橋隆先生(京都大学教授(当時)、現京都大学名誉教授)、中津良平先生(ATR 知能映像通信研究所社長(当時)、現関西学院大学教授)がそれぞれ最近の研究を紹介し、今後の VR 技術とコミュニケーションの将来について講演いただきました。後半の会場の参加者も含めたディスカッションでは、バーチャルリアリティ (VR) 技術を利用したゲームなどが子供たちに与える影響についての話題をふくめて様々な質問が講師の先生方に寄せられました。TV ゲームなどが子供たちに及ぼす影響は、社会的な関心が高いが、VR 技術そのものはまだ大きな影響を子供たちに与えるレベルまで到達していないというのが先生方のご意見でした。そのほかにも、多くの示唆に富んだコメントやディスカッションが行われ有意義なひと時でした。

また午後からは別室で、京都大学、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学によるバーチャルリアリティや次世代コミュニケーションに関する最新研究成果のデモンストレーションが行われました。拡張現実感 (AR) を利用したモグラたたきゲームや、全方位カメラを用いたテレプレゼンスシステム、ブロックを組み立てることでデータベースからブロック形状と類似した 3 次元モデルを検索するシステム、心臓の鼓動を触覚デバイスを用いて指に感じることができるシステム、医療教育のための胎児の成長過程を再現したコンピュ

ータグラフィックス (CG)、ウェアブルコンピュータの入力デバイスとして指にメニューを割り当ててその指を反対の手で触れることでメニュー選択を実現するインタフェースなどが公開され、多くの方々に体験していただくことができました。このような展示は、最先端の研究成果を市民の方々に身近に感じてもらえる良い機会であったと思います。

最後に、若干の反省点を挙げます。まず、会場のスペースとの関係で、市民講座を事前申し込み制としましたが、その必要はなかったかもしれません。また、部分参加も可能であることを明示したほうがより多くの参加者が得られたことであろうと思います。今度同様の企画を行う場合は、パブリシティをより重視し、広く市民に浸透させることが重要であると考えられます。市民講座開催にご協力いただいた方々に改めて感謝し、報告を終わります。



原島博先生 (東京大学) のご講演



パネルディスカッションの様子



デモンストレーションの様子

ヒューマンコミュニケーショングループ研究会・関連行事カレンダー

詳しくは、HCG ホームページ <http://www.ieice.org/hcg/jpn/> をご覧ください。

★ インタラクションによる知識の創生 (KCI) 研究会

期日： 2002年10月24日(木)
会場： 産業技術研究所つくばセンター
共催： 計測自動制御学会 SI 部門 相互作用と賢さ部会，電気学会「相互作用と賢さ」により形成されるネットワーク空間脳協同研究委員会
内容： インタラクションに基づく知の創発を目標とするシステム・アプローチに関する議論

と賢さ部会，電気学会「相互作用と賢さ」により形成されるネットワーク空間脳協同研究委員会，空間認識を利用した実用化技術共同研究委員会

内容： 公募による研究発表

★ 福祉情報工学(WIT)研究会

期日： 2002年12月6日(金)，7(土)
会場： 工学院大学
テーマ： 福祉情報工学とソフトウェア，一般

★ 福祉情報工学 (WIT) 研究会

期日： 2002年10月30日(木)，31日(金)
会場： 宇都宮大学
共催： 本学会音声 (SP) 研究会
テーマ： 福祉情報工学と音声処理，一般

★ ヒューマン情報処理(HIP)研究会

期日： 2002年12月19日(木)，20日(金)
会場： 東北大学
共催： 東北大学電気通信研究所音響工学研究会
テーマ： 感性情報処理の基礎と応用及びヒューマン情報処理一般

★ マルチメディア・仮想環境基礎 (MVE) 研究会

期日： 2002年11月14日(木)，15日(金)
会場： はこだて未来大学
共催： 本学会モバイルマルチメディア (MoMuC) 研究会，情報ネットワーク (IN) 研究会
テーマ： ウエアラブル・ユビキタス・モバイルおよび一般

★ ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 研究会 & ヒューマン情報処理 (HIP) 研究会

期日： 2003年1月24日(金)，25日(土)
会場： 岡山県立大学
共催： ヒューマンインタフェース学会
テーマ： コミュニケーション支援

★ ヒューマン情報処理(HIP)研究会

期日： 2002年11月21日(木)，22日(金)
会場： 鳥取環境大学
共催： 本学会パターン認識・メディア理解 (PRMU) 研究会
テーマ： ノンバーバルコミュニケーションにおけるヒューマン情報処理とメディア理解

★ マルチメディア・仮想環境基礎 (MVE) 研究会

期日： 2003年2月上旬
会場： 未定
テーマ： サイバースペースとコミュニケーションおよび一般 (仮)

★ インタラクションによる知識の創生 (KCI) 研究会

期日： 2002年11月30日(土)，12月1日(日)
会場： 南明ホテル(熱海)
共催： 計測自動制御学会 SI 部門 相互作用

★ インタラクション 2003

期日： 2003年2月27日(木)，28日(金)
会場： 学術総合センター 一橋記念講堂
主催： 情報処理学会

★ HCG 大会

期日： 2003年3月
会場： 未定